

ジオパークの鼓動 —変動する大地との共生—

日本ジオパーク委員会 委員長
京都造形芸術大学 学長おいけ かずお
尾池 和夫

UNESCO（ユネスコ）世界ジオパークは、2015年11月17日にユネスコの第38回総会において、国際地質科学ジオパーク計画（IGGP）の正式事業として認定されました。2017年2月現在、日本から8地域（洞爺湖有珠山、糸魚川、島原半島、山陰海岸、室戸、隠岐、阿蘇、アポイ岳）がユネスコ世界ジオパークに認定されています。

これらの地域は、日本ジオパーク委員会（JGC）が認定した日本ジオパークから選定されました。今回、2008年発足当時からJGC委員長を務められている尾池和夫先生にジオパークの魅力について語っていただきました。尾池先生は地震学者であり、総長カレを世に出された京都大学元総長でもあります。現在は京都造形芸術大学長を務めておられますが、日本ジオパークの認定審査のためにそれぞれの地域に足しげく通っておられます。訪れる人々や認定運動を進める地域の人々の目線で、世界でも類をみない日本列島の地域特性、そこに暮らす人々の逸話をご紹介します。

① 動き回る日本のジオパーク

日本のジオパークの活動を始めたとき、できたばかりの石というのがあったと提言しました。2012年、島原のジオパークユネスコ国際会議の島原宣言で、初めてユネスコの報告の中に、自然災害を学ぶ機能がジオパークにあるということが書き込まれ、自然災害が取り込まれました。日本のジオパークによって、ユネスコの活動の中に、「変動帯の、動き回る大地」という性格のジオパークが持ち込まれたわけです。変動帯にある日本を表す一番の自然の特徴は、地震と噴火と津波です。その恩恵を受けて日本という列島ができ、この地球の活動現場を見ることができる



のです。島原は、火砕流から立ち直ろうとしている村を見るという文化ですし、洞爺湖有珠山というのは、噴火したけれど一人のけが人も出さなかった。それを学ぼうというのがあります。その変動帯

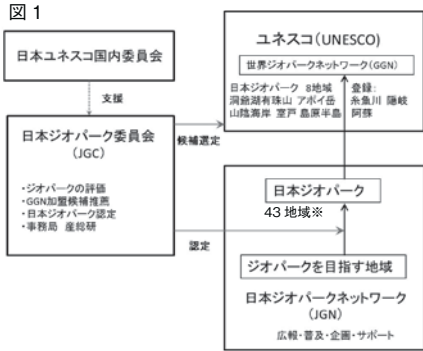
ジオパークって何？

地球の重要な地形学的・地質学的な遺産を保護し、研究に活用するとともに、自然と人間のかかわりを理解する科学教育や防災教育の場として、さらには新たな観光資源としてジオツーリズムを通じて地域の振興に活かすことを目的にした、ユネスコが認定した世界の「大地の公園」です。

の文化を世界の人々に紹介したい。地球を知ると同時に自然を学び、食べ物や飲み物を味わい、地域の歴史とそこに生まれた文化や暮らしにふれることができる、というのが、日本のジオパークの魅力となっています。

2 ジオパークの活動、ジオツーリズム「見る・食べる・学ぶ」

ジオパークを立ち上げる際のシンポジウムで、ちょうどお隣にいたJTBFふなやまの船山会長さん（当時）に、「見る・食べる・遊ぶ」のキャッチフレーズをお借りしますと申し上げたら、どうぞと言われ、そのときからずっと「見る・食べる・学ぶ」を使っています。「食べる」を入れることで、どうしても1泊して、その土地の一番おいしいごちそうを食べることになります。日帰りツアーの蟹とか、ときどきみかけますね。それは、おもしろくない。やっぱり、蟹を食べるにしても、夕日を見て、夕日が浦の温泉に泊まって、何でその砂浜が鳴くんだとか、そういうことを話しながらゆっくりと食べることで、地元の人との交流が生まれ、宿の人とも喋るといのが狙いなのです。この蟹がどうして美味しいか、理由はすぐその海が深いという海底地形にある、つまり、朝出て行った船がその日のうちに戻ってくるので、宿に泊まった客は、その日水揚げした蟹をすぐに食べられるから美味しいのです。ですから「日帰りの蟹」で美味しいんですよ。「日帰りツアーの蟹」ではなく、海から日帰りするから……そういうことが、一



日本におけるジオパークの体制

* 出典：ジオパークとエコツーリズム：エコツーリズム Vol.15, No.3, p.4を基に作成

つひとつジオパークの中で学べるわけです。

21世紀になってJTBFの研究所が生み出したのは、着地型旅行です。今までのやり方は、発地型旅行というもので、たとえば京都の団体さんが京都のガイドさんを連れて、京都の旅行会社が旗を持って一緒に団体バスに乗って行くというようなものです。そのまま、その人が案内して帰ってきます。そうではなく、ガイドさんは付いて行かずに、観光客が現地に着くと、現地のガイドさんが待っていて、現地のメニューで案内してくれるというのを着地型というのです。これが、ジオツーリズムの旅のスタイルに実によくあっているのです。

3 アカデミックなガイドの養成

そこで、地元のガイドグループをきちんと作り、科学的な知識をきちんと勉強して、それを専門用語も使わず観光客にしっかり伝え、食べ物や飲み物の説明もしてくれるガイドを養うということを主体にしたんです。「見る・食

べる・学ぶ」と「着地型旅行というスタイルが合致して、現地の活動が定着してきています。そういう趣旨で、ガイド同士のネットワークができて、お互いに交流したり、訪問したりもしています。こんなやりかたがあるんだと、学んで帰ってくることによって、だんだん上手になってくる。ガイドが育つと、トップダウンではなくなるわけです。ボトムアップになって、地元の人を中心になってジオパークの活動をします。トップである自治体に予算や拠点となる場所、支える事務組織など、バックアップ機能ができており、その上で市民がボトムアップで活動しているという仕組みができあがってきました。こうして、ジオパークとして認定するというやりかたが、ようやく緒に就いてきました。

私は、ガイドさんには、「知らんものは知らん」「わからんことはわからん」で、正直に話すべきだといっています。バスガイドさんは、「あの岩はインディアン岩っていいます」などといいますが、『インディアンがどうしたん?』って思いますよね。確かに、インディアンみたいな顔をしているけれど、それで終わったらどうしようもない・・・何で、人間の顔になって首が細くなったのかというと、一部に弱い地層があって、そこだけ壊れやすいから、波打ち際にあれば上が残って下が痩せて、人間の首ができるわけです。これを「差別浸食」といいますが、最初からこれをいってもだめです。アカデミックなガイドさんは専門用語を使ってはいけ

ません。専門用語がわかっていて、それを上手にどういう意味かを説明できることが大事なんです。10年後に来たらもう首は落ちているかもしれません、というと、わかってくるでしょう。最初から砂岩層、泥岩層といってもわからないわけですし、インディアン岩だけでもわからない(笑)。それが難しい。こういう地元のガイドを育成すると、知ったかぶりの偽物のガイドは自然と淘汰されていきます。

④ エコツーリズムとジオツーリズムとの連携

トップダウンのツーリズムでは、国が作った施設、県が作った施設、村が作った施設と、それぞれが無関係に活動してしまうことがネックになります。観光客はどこに行ったらいいのかわからず、うろうろしてしまう。だから地元ボトムアップしかないといっているわけですが、地域を中心にして考えるとエコツーリズムとジオツーリズムも他のものもすべてがつながるわけです。エコツーリズムの重点にある生物多様性も大地の多様性の一形態ですので、エコツーリズムを取り込むような形でジオツーリズムとの連携をはかることができます。トップダウンとボトムアップ、協力・連携することで、その中でさまざまな分野の専門家が会おう場づくりを大事にしたいという思いもあります。

⑤ 山陰海岸ジオパーク

ここで、ジオパークの例をあげてみましょう。2010年に世界ジオパークに

認定された山陰海岸ジオパークは、3府県、鳥取・兵庫・京都にわたる長い地域です。最初、鳥取では、砂丘を売り込むものと思っていたので、砂丘を名物にしたかったようですが。砂漠は、日本でも他所にもあるし、なおさら世界中にはいくらでもある。そんなところにわざわざラクダをもってきて、偽物の風景を作って、それを「売り」にするのは、ジオパークと違うと申し上げたんですよ。日本海は1,600万年前に拡大してできあがって完成した、世界で一番若い海です。日本海の拡大という、それをテーマにして展示する。山陰海岸ジオパークとして、海岸を見せる。開いた海の、この海岸の相手はウラジオストックにある。そこへ日本海という暖流の海が入ってきた。この海は温かいからどんどん蒸発する。それをシベリアから距離の長い季節風が吹き寄せて、蒸発した水を全部集め、距離に比例して風が長く当たってくるところほど雪が深く、日本というのは豪雪地帯であると。中緯度まで豪雪があって、何メートルまで雪が積もるなんて、世界中どこにもない。モンゴルには雪がないですよ。冬の人工衛星の写真を見たら、日本だけすうっと白く筋が入っている。そこを、わからせるのがジオパーク。そのことを山陰海岸は見せる、といったら、ようやくわかってもらえて、日本海の拡大という展示になったんです。それで今や山陰海岸をカヌーやカヤックで海から岸を見るというジオパークになったんです。



写真1 山陰海岸ジオパーク 羽尾岬

⑥ 海と山の出会い —大分姫島と豊後大野の交流—

地元の人にもわかっていなかった大地の恵みを地元の人が発見するという、これがまず第一のジオパークの役目です。例をあげると、大分豊後大野ジオパークという山の奥の豊後大野市のジオパークと、おおいた姫島ジオパークという海に浮かぶ一島一村のジオパークがあります。この物語は、大分県知事が一所懸命テコ入れしてこの2つを同時に申請し、認定されて始まりました。夏休みになって、一度子供たちを交換してみたらどうかという話になったんです。山奥の子どもが島へ、島の子どもが山奥へと。海へ行った子どもは、「この川流れていないっ、浮く!」という。山へ行った子どもは、「海の水が落ちてるっ、冷たい!」と大騒ぎするわけです。そして帰ってきて物凄く盛り上がり親たちに報告する。そして他所にはなくて、ここにあるものをこれは大事にしないとイケないと言いだすわけですよ。そしたら、大人がね、そんなええもんかと（笑）、言い出すという事件がありました。

実は、豊後大野市長が、市長に当選したときに講義をしに小学校を回った。すると、子どもたちが、「市長さん、ここには何にもないよ。親がここは何にもないところだと言っている」という。それを聞いて市長さんはショックを受け、そのときにちょうどジオパークの話が耳に入ってきたので、『これをやらなアカン』と言いだしたという背景があったんです。島の子どもと山奥の子ども。交流が生まれると、子どもたちが『うちはこんなええもんがある』と言い出すものだから、大人も、へ～っと言って、みんな、子供の発見の後からついてきて、「うちにはないものがない。いっぱいいろんなものがある」ってことを言いだしたそうです。大成功でね、力を入れて、毎年子どもの交換をされているんです。

その姫島のほうは、もう親子代々ずっと村長をやっているような村長さんなんです。餅まきの習慣が昔からあって、お正月だったとか何か行事があると、餅をまく。でも、もう長い間やってなかったところ、ジオパークに合格したので記念に餅まきをしようとなったら、島中の人があるものすごく喜んで集まってきた。『これは毎年やらなアカ

ン』ということになったということですよ。ジオパークのおかげで餅まきが復活したとってね、村長さんもととても喜んでいました。そういうきっかけを作るのと、子どもを通じて自分のところを発見するというね、そういうことができました。

⑦ 大地の多様性(ジオダイバーシティ)の国、日本列島

日本列島は、比較的短期間に日本海が拡大して、離れた陸が南下してできたといってもいいです。日本海が広がる前は、要するに大陸にいたわけです。次々にプレートが運んできた島がくっついてきた。日本海が開いたことによって、それがバリバリと剥がれて南下した。だから日本列島は南ほど新しい地層になっています。後から後から島がくっついたから、付加体っていうんですけど。今の場所に来てから、本州、四国、九州にまた島がやってきてくっついたので、高知とか室戸とかでは、新しい地層になっています。伊豆半島というのは最後に日本列島へくっついた島です。南から来た火山の贈り物です。新しい地層はまだ固まっていないから浸食されやすいので、室戸岬に行



写真2 おおいた姫島ジオパーク 左：姫島全景 右：渡り蝶アサギマダラの休息地



写真3 室戸ジオパークの空海が悟りを開いた洞穴、御厨人窟（みくろど）。「ピカチュウ」のシルエット・そのもの

くと、昔弘法大使がお風呂に使ったというところがえぐれていて、それは海蝕されて凹んでいて洞穴になっているわけです。そこからぱっと出てきたときに空と海が眼前にあって、空海という名前になったという有名な話があるわけですが、今は、洞穴の中に入って外を見るとね、眼前にもう海は見えなくなっています（写真3）。洞窟は高い所にあるわけです。100年に1回巨大地震が起こって、地震のたびにだんだん隆起していったからです。だから、今波打ち際の平らになっているところは、次の南海地震でまた1mくらい高くなって、階段状の地形ができていくんです。

言葉もまた、その土地の暮らしに必要な使いわけがされて発展してきます。木の名前、魚の名前、地形にしても、峠なんていう漢字は国字です。日本は山国で、必ず二つの国が出会う国境は山の間の鞍部になっていて、私たちは峠と呼んでいます。ジオ多様性

で、大地が細かく区分けされていて、地層の弱いところが浸食されて低くなっているのです。最短距離は鞍部ですから、そこを越えていく。それが峠なんですよ。長野県なんか峠だらけで、すべての国へは峠を越えていくわけですね。だから山へんに上下と書く国字です。その峠っていうのは、中国にはない。中国は、野原しかない山脈です。日本は、細かい地質からできた国で、山国で独立していて、国境があって、峠がある。昔は、人が旅立つとき、みなで峠まで見送りに行きました。自然の大地は、暮らしと文化に密接につながっているのです。



写真4 高知で地震のことをお話しをするときに、地震の大きさを、「ちくっと大きい」「しょう大きい」「まっこと大きい」「こじゃんと大きい」と方言でいうと、地元の人にはちゃんとわかる。ちくっと大きいは、ちょっと大きい。しょう大きいは、大そう大きい。まっこと大きいは、それをもう少し誇張している。「こじゃんと大きいよ」といったら一番大きい、巨大地震です。だから、マグニチュード6,7,8,9を形容詞でいうことができるんです